

# 地域社会における音楽教育の役割に関する一考察

—秩父地域の祭り囃子の指導に着目して—

大 海 由 佳

## The roles of music education in a community

— Focusing on the instruction of the festival music in Chichibu area —

OUMI Yuka

キーワード：音楽教育、祭り囃子、正統的周辺参加

### I はじめに

平成元年小学校学習指導要領改訂にあたり、答申の基本方針のひとつに「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視する」という項目が挙げられた。これにより、小学校音楽科では学習における基礎段階として、日本古謡、わらべうた、邦楽などに慣れ親しみ日本の心を伝え学ぶことが求められるようになった。平成23年4月1日から全面実施された最新の小学校学習指導要領においても「国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う観点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする」と述べられている。

本研究では、「地域」における異年齢の関係性や徒弟的学習形態による長年の伝統音楽の指導と伝承方法に着目した。このような指導と伝承方法は、近年の学習指導要領による学校教育での同年齢の平等な関係性と公平な機会を前提とした日本の伝統音楽や邦楽の指導とは異なる。本稿では、地域における伝統音楽の伝達を通して行なわれる伝統的な音楽教育方法とこの音楽教育の指導によ

って生まれる幅広い年齢層の教育集団の形を示していく。さらに、実践しながら参加する参加型学習とはどのようなものか、どのように音楽の文化伝達が行われているかを、伝承方法のひとつの仮説として「正統的周辺参加」の理論に視点を置いて明らかにしたい。

事例として、秩父地域の各屋台町の町内祭り、子ども祭りである川瀬祭り、成人男性の祭りである秩父夜祭りで演奏される「屋台祭り囃子」をあげる。300年続く秩父の伝統音楽である「屋台祭り囃子」が地域社会でどのように子どもに指導され、伝承されているかを、A屋台町とB屋台町のお囃子指導実践例からの観察、お囃子の指導者や保存会会員のインタビュー調査を踏まえて述べていく。

### II 秩父の祭りと秩父屋台囃子

#### 1. 秩父夜祭りと川瀬祭り

埼玉県秩父地域には、大小合わせて400を超える祭りが存在する。江戸中期、寛文年間（1661年～1672年）から続く日本三大曳山祭のひとつである「秩父夜祭り」は、この中でも秩父最大の祭りであり、12月に祭事が行なわれる。秩父夜祭りは、秩父神社と秩父地域の各屋台町内の成人男性が中心となり準備、実施される。秩父夜祭りの屋台に乗り屋台囃子を演奏するのは、成人男性のみである。祭り当日には、絢爛豪華な笠鉦2基

と屋台4基の曳き回し、曳き踊りなどが行なわれる。毎年この時期には、約20万人の観光客が秩父を訪れる。

「川瀬祭り」も江戸中期から300年継承されている秩父神社の祭りである。川瀬祭りは12月の秩父夜祭りと対比する祭りともいえる。秩父夜祭りに対して川瀬祭りは昼の祭り、同様に冬に対して夏、成人男性の祭りに対して男女子どもの祭りである。川瀬祭りでは、夜祭りに比べると小ぶりだが、豪華な笠鉦4基と屋台4基が「秩父屋台囃子」を響かせながら秩父市内を子ども達によって曳き回される。屋台内では男女の子ども達が中心となって屋台囃子を演奏する。

秩父地域ではこの2つの大きな祭り以外にも各屋台町の町内祭りが1年中秩父市のそれぞれの地域で年に一度実施されている。

## 2. 秩父屋台囃子

江戸祭り囃子では複数の曲目を演奏するが、秩父屋台囃子には曲目という概念はない。「ドコドコ」<sup>(註1)</sup>と表現するように大太鼓が中心となり、締め太鼓（小太鼓）が一定のリズムを刻む演奏形態である。曲は、大太鼓の「出」「打ち込み」、締め太鼓の「打ち出し」「玉入れ」、山車を止めるときの囃子「打ち止め」などの打ち方によって構成される<sup>(註1)</sup>。楽器編成は、大太鼓1、締め太鼓2－4、鉦1、篠笛1である。

屋台囃子の演奏は、笠鉦では床下の腰幕や腰支輪に囲まれた土台の中で、屋台では舞台後方の襖と後幕で囲まれた楽屋で行われる。このため、祭り当日、屋台囃子を演奏する様子は外部から見るができない。

### (1) お囃子演奏の形態と伝承方法

秩父屋台囃子は、各屋台町内で伝承されている。これにより、屋台囃子の演奏には屋台町ごとの特徴がみられる。各屋台町の屋台囃子は、12月の秩父夜祭り、7月の川瀬祭り（子ども祭り）、屋台町内の祭りに出る屋台（山車）で演奏される。

屋台囃子の中では、特に大太鼓の演奏者の独自

的要素が強い。それぞれの叩き手は、屋台町の囃子から生まれる自分自身の屋台囃子を即興的に組み立て、個性的に演奏する。この大太鼓の即興的な演奏に、締め太鼓、篠笛、鉦が一体となり、音楽を共有し演奏してゆく。このような演奏方法のため、秩父屋台囃子には決まった演奏の型はなく、屋台囃子の伝承に「楽譜」「教則本」「手本」といった定型やジゴト（口唱歌）は使用されない。子ども達は、実際の大人の演奏に接しながら屋台囃子を習得してゆく。

### (2) 秩父屋台囃子伝承としての保存会の活動

「秩父屋台囃子保存会」は、秩父市教育委員会下部組織であり、秩父地域の10の屋台町と2つの屋台囃子保存会で構成されている。秩父屋台囃子保存会の主な活動は、秩父神社や各町会での太鼓指導と練習、有志による保育所や小学校での太鼓指導、海外と国内での秩父屋台囃子の演奏である。

この「秩父屋台囃子保存会」とは別の組織として、秩父夜祭りの6屋台町にはそれぞれの「屋台囃子保存会」がある。国の重要無形民俗文化財に指定されているこの6屋台町の囃子保存会が中心となって12月の秩父夜祭りを実施している。川瀬祭りにも5つの各屋台町囃子保存会がある。

各屋台町囃子保存会は、各屋台町内の子どもたちに屋台囃子の指導を行っている。各屋台町には「太鼓長」という役職が置かれ、大人の異年齢の人たちが、日常の屋台囃子の指導、祭り前に行く「ならし」と呼ばれている屋台囃子の練習会の総括、祭礼当日の屋台囃子の指揮を行っている。各屋台町囃子保存会は、それぞれの屋台町の屋台囃子を伝承し、伝統を受け継いでいる。

### (3) 秩父地域と屋台囃子伝承

秩父屋台囃子は、12月の秩父夜祭り、7月の川瀬祭り（子ども祭り）、各屋台町の祭りに共通のお囃子である。このため、屋台町の子どもは、子どもだけの集団で伝承音楽である屋台囃子を学ぶことはなく、町内の一員として大人や先輩と共に

練習を行う。また、子どもにとって屋台囃子の練習は、川瀬祭りという本番に向けての練習であり、男子にとっては将来秩父夜祭りで演奏するための練習となる。秩父夜祭りと川瀬祭り以外にも、1年中秩父市内のそれぞれの町内や地区で年に一度の祭りが実施されているため、秩父地域ではお囃子の練習が年間通して行われている。これにより、子どもから大人まで日常的に祭りについての話題が生まれる。

### Ⅲ 研究調査

#### 1. 対象地域と研究期間

本研究調査は以下のように実施した。

対象地域：埼玉県秩父市 A 屋台町と B 屋台町

研究調査期間

- ・2009年7月4日（土）19時「川瀬祭り説明会と衣装合わせ」観察調査
- ・2009年7月11日（土）19時「祭り囃子の練習と子ども交流会」観察調査
- ・2009年7月19日（日）「秩父川瀬祭り」観察調査
- ・2010年1月27日（水）A屋台町青年部子ども担当者へのインタビュー調査
- ・2012年7月21日（土）B屋台町の秩父屋台囃子保存会会員へのインタビュー調査
- ・2012年7月29日（日）B屋台町の町内祭りのお囃子の観察調査
- ・2012年9月15日（土）杉並区内施設におけるB屋台町のお囃子演奏の観察調査
- ・2012年11月25日（日）B屋台町の秩父夜祭りに向けての「ならし（総練習）」の観察調査
- ・2012年12月3日（月）秩父夜祭りの観察調査

#### 2. 研究方法

研究方法は、ビデオカメラと写真による記録観

察調査と A 屋台町川瀬祭り青年部担当者と B 屋台町秩父屋台囃子保存会会員のインタビュー調査によるものである。ビデオカメラと写真による記録観察調査は、主に子どもの屋台囃子練習と「秩父夜祭り」「川瀬祭り」「屋台町内の祭り」の本番時に行った。

### Ⅳ 考察

秩父屋台囃子の伝承伝達は、学校の音楽教育の学び方とは異なる。本研究調査では、どのような学び方がおこなわれているか、その学びが行われている地域の特徴を明らかにしたうえで、具体的な学び方をみてゆきたい。その際、「正統的周辺参加」<sup>(註2)</sup>を援用して検討をおこなう。

正統的周辺参加とは、「ただ知識を詰め込む学習ではなく、実践共同体の中で実践を積んで行くことにより、仕事と学習内容が周辺の作業から中心的へと向かい、熟練してゆく」という考えである。この概念が、秩父地域にある音楽教育のお囃子指導を説明するうえで、ひとつの有効な枠組みになるのではないかと考えた。

#### 1. 地域社会 屋台囃子の秩父地域における役割

秩父地域においても、近年の都市化、少子化により地域住民の交流が失われていっている。しかし、川瀬祭りや秩父祭り、各屋台町の町内祭りを実施し、年間を通して行われる屋台囃子の練習によって、屋台町の人間関係が生み出され交流の継続が可能となっている。

20歳代の A 屋台町青年部川瀬祭り実行委員は「川瀬祭りの祭り囃子練習と子ども交流会によって、A 屋台町地域全体にどのような子ども達がいるのかわかった」と述べている。また、川瀬祭りを実施した後の子どもとの関係について「川瀬祭りの祭り囃子練習と子ども交流会で知り合った子どもたちが、町内や駅前で声をかけてくれるようになった」「町内にある小学校の運動会の観戦に誘われ、見に行くと、子ども達が寄って来て嬉しかった」というような感想を持っていた。

また、B屋台町の屋台囃子保存会会員は、インタビュー調査において次のように述べている。

#### 事例1

成長するなかで、町内に太鼓仲間ができました。この仲間は家族間でも仲間となり、今日まで長く交流し地域内で助け合っています。20歳代から40歳までは演奏が中心でしたが、40歳過ぎた頃、町内になかった青年部を立ち上げました。町会内の青年部は20歳代から40歳代までの人で構成されています。昭和39年から休止している町内の祭りを平成7年に復活させ、祭り屋台を修復したことが、町内会の青年部立ち上げのきっかけとなりました。このことにより、同じ町内会の人間関係が明らかになり、交流が始まりました。青年部は、祭りと祭り囃子の後継者育成と町内の人間関係の把握をすることの役割を自然に受け持つようになりました<sup>(註3)</sup>。

秩父地域の屋台町では、1年中祭りのお囃子の練習が行われ、屋台町内の多くの人々がこの練習や祭り関連の事柄に日頃から関わっている。パトナムは「イタリアの一部の州には、合唱団やサッカー・チーム、野鳥の会やロータリー・クラブが数多く存在している。これらの市民の大部分は、日刊紙で地域の諸問題に関する記事を熱心に読む」<sup>(註4)</sup>と述べている。このように地域における記事や問題に関心のある市民は、その地域で自発的な協力関係とネットワークを生み出し有効に活用していると考えられる。屋台町内の多くの人々は、お囃子の練習や祭り関連の事柄に日頃から関わることで、地域力を生み出している。これにより、学校とは異なる音楽教育の伝承方法が可能となっている。また、日常のお囃子の練習は秩父地域の人々に子どもを見守る意識を育くんでいると思われる。

## 2. 異年齢集団

秩父地域の子どもは、幼児期から日常的に各屋

台町のお囃子を耳にしている。さらに、締め太鼓の練習をすでに始めている子どもも多い。このためA屋台町における「川瀬祭り」の練習時には、聞き慣れたお囃子のメロディやリズムを実践していくことになる。子どもは屋台囃子の締め太鼓の基本的リズムと打ち方を、20歳代の青年部太鼓担当者に教わり、合わせ方を確認する。その後、子どもは練習をしながら友達や青年部の大人の演奏を見聞きし、その演奏を子ども自身の練習や達成度の目標とする。B屋台町の「秩父夜祭り」の総練習「ならし」においても、就学前の幼児から小学6年生までの子どもの隣に座った数人の40歳代—50歳代の成人男性が、お囃子の速さやリズムを手振りでも指導していた。

秩父屋台囃子には楽譜がないので、大人の演奏を「模倣」し大太鼓と締め太鼓の学習を進めていく。その具体的な様子を以下に示す。

#### 事例2

A屋台町の練習場では、祭り囃子の練習が行われ、青年行事部太鼓係が中心となって、締め太鼓を打つ小学生と大太鼓を打つ中学生と高校生を指導した。祭り囃子の練習に参加したのは、女子4名、男子15名であった。祭り囃子の楽器は、鉦・笛・大太鼓・締め太鼓である。締め太鼓と鉦は、小学5—6年生の男女が約3—5分交代で順番に打つ。待っている間も子どもは打つ様子を見学し、基本となるリズムパターンを確認していた。大太鼓担当の中学生と高校生は2—3人と少人数であったため、締め太鼓よりも長い時間大太鼓を打ち続けていた。子どもの中でも演奏の上級者は、打つリズムを工夫し、個性的なリズムパターンを試していた。

20歳代の青年部男性は、締め太鼓担当の子どもに「打つ姿勢」「打つリズムがお囃子の流れから遅れないように」「周りの打つ音に合わせた音量で打つ」などのアドバイスを行っていた<sup>(註5)</sup>。



### 事例3

B屋台町会秩父夜祭り囃子総練習「ならし」では、B屋台町内の成人男性が中心となつて、締め太鼓を打つ幼児と小学低学年生、大太鼓を打つ小学高学年生を指導した（図1）。祭り囃子の練習に参加したのは、高校生男子6名、小学生女子4名、小学生男子10名、幼児2名であった。成人は30歳代—80歳代の男性35名である。成人女性は、秩父夜祭りの屋台に乗って屋台囃子を演奏できないので、秩父夜祭り囃子総練習に参加していない。大太鼓と締め太鼓は、小学5—6年生の男女が約3—5分交代で順番に打った。大太鼓の順番を待つ間は、締め太鼓を叩いていた。子どもの演奏する周りには成人男性が四方取り囲んで座る。正面にはテーブルが置かれ、60歳代—80歳代の地域の長老が10名座っていた。午後6時30分から7時30分まで一度も子どものお囃子演奏が途切れることなく、子ども達の私語もなかった。練習会場では子ども達の集中した演奏と成人男性の手本の演奏が行われた。

午後7時30分から成人男性の祭り囃子の練習が行われた。小学生の子ども達は練習会場の一角にあったテーブルに座り、用意された夕食を取りながら憧れであり、目標である成人男性の演奏を聴いていた<sup>（註6）</sup>。

このような異年齢による模倣をベースとした指導について、大田堯は「教育とは何か」で「まね

ながらも、—略— 似せようとする作為を越える境地を教え示すことができる」と『型』への熟練について述べている<sup>（註7）</sup>。観察の中でも、演奏の上級者は模倣のリズムに子ども自身の工夫したりリズムを生み出し、模倣から創造へと発展させていた。異年齢集団による学びの形態であることにより、学校教育とは異なる学び方が成立していたといえる。

### 3. 伝達の方法—正統的周辺参加

秩父地域における秩父屋台囃子の指導は、各屋台町内の異年齢集団による徒弟的学習方法によって行われている。「川瀬祭り」では、祭りの運営責任者を20歳代の青年部の男女としている。このため、「ならし（お囃子の総練習）」では、20歳代の青年部の男性が中心となって小学生に締め太鼓と大太鼓を指導していた。30歳代から50歳代の男性は、直接小学生を指導することではなく、練習場の隅で練習を見守り、時々指導の様子を見るために小学生の近くに行っていた。20歳代の青年部の男性は、子どもへの接し方や指導方法について疑問が生じた時、部屋にいる30歳代から40歳代の男性に話しかけていた。その具体的な様子を以下に示す。

### 事例4

A町会青年会の30—40歳代の男性は練習会場の周りで見学をしているが、直接子どもにお囃子指導をおこなわない。気掛かりなことがあると20歳代の青年部に話しかけ質問をしていた。20歳代の青年部の人も練習会場にいる40歳代の男性に説明を求めている。また、大太鼓を打つ中学生と高校生が疲れてくると、しばらくの間大太鼓を代わりに打っていた。中学生と高校生は、大人の打つ大太鼓の切れのあるリズムと音量、多様な太鼓のリズムパターンに感心し、聞き入っていた。メロディを担当する笛は青年部が中心となり演奏していた。

練習場内では、子どものお囃子練習をA

図1 B屋台町での秩父夜祭り囃子総練習風景



屋台町の幅広い年齢層の大人、子どもの保護者である成人女性と男性が見学していた。さらに、一部の大人は祭りの準備を手伝っていた。練習場の外では、青年行事部やA町会青年会の30歳代—40歳代の男性が、練習の様子を見ながら木札にA屋台町の紋を焼き印していた。この木札は、祭り当日町内に配布する「お水取り」の水に添えるものである<sup>(註8)</sup>。

お囃子の学習過程において、子どもは大人の締め太鼓や大太鼓の演奏を見本とし模倣してゆく。大人は、子どもの締め太鼓の習得の過程や習熟度を見極め、祭りの花形の楽器である大太鼓の演奏へと導く。B屋台町の屋台囃子保存会会員は、インタビュー調査において次のように述べている。

#### 事例5

秩父祭り屋台囃子保存会では大太鼓は大人の世界の楽器ですが、上手であれば子どもでも打てます。大太鼓を担当するのは小学校高学年の相当上手な子と中高生です。大太鼓を打つようになるには「礼儀」があって、まず小太鼓を打てるようにテクニックを身につけてから大太鼓を打つ立場となれる。大人も小太鼓が上手になった子に「大太鼓を打ってみるか」と声をかけます<sup>(註9)</sup>。

秩父地域の20歳代の青年部の男性は、将来、男性成人の祭りである「秩父夜祭り」を運営し、囃子演奏の担当をする。子ども祭りの「川瀬祭り」で祭りの運営方法を30歳代以上の男性から学び、「川瀬祭り」を実施してゆく。また、小学生の屋台囃子を指導することにより、お囃子の指導方法を実践する。20歳代の青年部の男性は「川瀬祭り」を実行する過程で、祭りの運営については中心的存在になることを求められ、お囃子の練習においては、指導される側から指導する側に立場の変化を求められる。

B屋台町の屋台囃子保存会会員のインタビュー

調査では、大人の指導によって、子どもが締め太鼓という「お囃子における周辺の立場」から「お囃子の中心的立場」である大太鼓の奏者へと分化されていくことが明らかになった。

#### 4. 本番の位置付け

「秩父夜祭り」は、江戸中期、寛文年間から続く日本三大曳山祭のひとつであり、「川瀬祭り」も江戸中期から300年継承されている秩父神社の祭りである。秩父地域の人々の誇りとなっている伝統ある祭りに向けて、屋台町の住人は日常から「非日常である祭りの本番」を意識し、屋台囃子の練習を行っている。B屋台町の屋台囃子保存会会員は、インタビュー調査において次のように述べている。

#### 事例6

地域で屋台囃子を子どもや若い人に教える人は、教えた人からお礼を受け取りません。秩父の屋台町ではこれが慣習となっています。教わった子どもたちは、大人になったら次の世代に無償で教えていきます。永く受け継がれてきた屋台囃子の伝承方法です。

本番で間違えて打つことは許されません。厳しい世界です。秩父の夜祭りでは「お囃子のプロ」として祭りに参加します。日々の練習の成果を本番にぶつける。各町会の看板を背負っている自覚が大切です<sup>(註10)</sup>。

秩父地域でのお囃子には、学校内や教育関係者内での内輪の音楽発表会ではなく、地元住人と一般の人々である観光客に向けての「真剣勝負の本番」がある。子ども達は大人と同様に「お囃子のプロ」となることを求められている。秩父地域における子どもの祭り囃子練習は必要に迫られていることが明らかになった。

## V 結論

日本各地には、「地域の子どもの交流の場とし

ての子どものための祭り」が存在する。しかし、秩父地域の子ども祭りである川瀬祭りは秩父夜祭りと同じ秩父神社の祭事をおこない、屋台囃子も各屋台町伝承のお囃子を演奏する。祭りの形式も笠鉦と屋台の曳き回しという同じ実施方法である。また、子どもから大人まで参加する各屋台町内のお祭りにおいても、お囃子は川瀬祭り、秩父夜祭りと同じ屋台囃子を演奏する。秩父地域において子ども達は、1年を通して祭りの「本番」を意識し、「本番」の日を目標にお囃子の学習を行う。祭りの伝承者となる人々も同じ秩父市内に在住し、地域共同体を形成している。このことから、川瀬祭りの屋台囃子は、日本各地に存在する「地域の子ども祭りのための祭り囃子」の役割だけでなく、秩父地域の子どもが「秩父夜祭りの屋台囃子の伝承者として育つ」ための経験と学習の場として存在している。これにより、川瀬祭りは他の地域では見られない秩父地域の特徴的な子ども祭りといえる。

日々の暮らしや地域の行事の中で、人々は何らかの共同体に参加する。共同体には、それぞれ独自の技術や道具、社会的実践がある。川瀬祭りにおいて、子どもは初心者である。その一方、お囃子の指導と実践からも明らかとなったが、子どもは伝承者として、まずは祭りの中心ではない周辺的で簡単な役割を担う者として期待されている。学校における音楽教育のように、教員が教え込みテストで確認する「教え込み的教授行為」ではなく、社会的実践の中で「参加」することにより簡単な役割ではあるが、共同体にとって「正統的」仕事であり、必要である仕事を学び実践する。この周辺の役割を担いながら、子どもは中心的役割を担う熟練者や古参者を見て憧れ、目標としていく。「教え込み的教授行為」は「誰が何のために」という目的と学習意義が見え難い。音楽の技能や知識を単に教えるのではなく、実践そのものを構成し、子どもを学習する者ではなく実践する者と捉えゆく。音楽教育の学習パターンをただ追うのではなく、お囃子という音楽を通して社会共同体の熟練的存在となることを目指す。

秩父では、幅広い年齢層の人々が、それぞれの年齢層の役割を「あて」にされ、大きな共同の課題である「祭り」に生きている。30歳代から上の大人は青年の役割を内面から共感し、青年が、川瀬祭りだけでなく、秩父夜祭りの次世代のリーダーとなること期待している。青年は、祭り時にただ子どもを保護管理するだけではなく、子どもを祭りに積極的に参加させ、子どもが祭りとその祭りの音楽の伝承者として育つよう期待している。

学校教育において子どもを指導する時、大人はまず学習機会の平等性や公平な学習環境の保護と子どもの擁護を重視する。しかし、秩父地域における伝統音楽の伝達を通して行なわれる伝統的な音楽教育方法において、子どもは、幅広い年齢層の地域の人々から期待され、頼みにされることにより、物事に積極的に関わり成し遂げる意欲を生み出していた。

## 註記

註1 『秩父の祭り』郷土出版 1998年 p86

註2 J・レイヴとE・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加』産業図書 1993年

正統的周辺参加

J・レイヴとE・ウェンガーが90年代に提唱した「正統的周辺参加 Legitimate Peripheral Participation: LPP」の概念の提唱による (Lave and Wenger, 1991)。

正統的周辺参加論では、学習というものを「実践の共同体への周辺の参加から十全的参加 (full Participation) へ向けての、成員としてのアイデンティティの形成過程」としてとらえる。

註3 2012年7月21日(土)に行ったB氏(男性 54歳)へのインタビュー調査より

註4 パットナム『哲学する民主主義』NTT出版 2001年 p137

註5 筆者のフィールドノートの2009年7月11日(土)の記録より

註6 筆者のフィールドノートの2012年11月25  
日（日）の記録より

註7 大田堯『教育とは何か』 岩波新書 1990年  
p139

註8 筆者のフィールドノートの2009年7月11  
日（土）の記録より

註9 2012年7月21日（土）に行ったB氏（男  
性 54歳）へのインタビュー調査より

註10 2012年7月21日（土）に行ったB氏（男  
性 54歳）へのインタビュー調査より

（埼玉東萌短期大学非常勤講師 大海由佳）